

現代タイにおけるクアイの人々が“ゾウ使い”になること —人間と動物のコンタクト・ゾーンにおける変容と非対称性—

大石 友子

1. はじめに

(1) 目的

本稿は、タイにおける多義的な「ゾウ使い」の位置づけと、文脈によって異なる「ゾウ使い」の範疇を示しつつ、ゾウの存在によってクアイ¹の人々がゾウ使いへとようになっていく様子を描き出す。そして、調査地に関する既存の研究の中で二項対立的に描かれてきたゾウ使いとゾウの関係を再考することを通じて、共に生きる人間と動物の関係性が非対称的な力関係を内包しながらも、互いの存在によって互いが新たな主体として変容することを論じる。

タイにおいて一般的に「ゾウ使い (*khwan-chang*)」とは、ゾウの上に乗る、指示を出す人々のことを指す。したがって、少なくともゾウに乗ることと指示を出すことが出来れば、誰もがゾウ使いと呼ばれ得る。一方、ゾウ使いとしての技術を持つ集団として想起される人々もいる。その一つが、クアイの人々である。クアイの人々は、かつて森でゾウ狩りにより捕えたゾウを調教し、売買してきた人々としてタイ国内では知られている。1961年以降ゾウ狩りは行われなくなったが、「ゾウの村 (*muban-chang*)」²と呼ばれているスリン県タトゥーム郡ガポー町タクラーン村を中心とした地域では、現在もクアイの人々がゾウと共に暮らしている。

タクラーン村におけるクアイの人々とゾウの関係についての研究は、主にタイ人研究者によって学位論文としてまとめられている。こうした論文の提出は、1990年代半ばから2000年代に集中している。この時期には、ゾウがゾウ使いによってバンコクなどの都市部に連れてこられる「街歩きゾウ (*chang-reron*)」が、利益に目のくらんだ人間によるゾウの搾取であるとしてメディアに取り上げられ、社会問題化した [Pianchob 2007]。そのため、経済学や社会学、文化人類学と分野の違いはあるものの、資本主義経済下におけるゾウやクアイ文化の商品化 [Boonsiritommachai 2005, Pianchob

2007]や、ゾウの都市部での街歩きが生じた経緯や要因 [Sakunwatthana 1995]について論じた論文が多く見られる。これらの研究は、クアイのゾウ使いたちの社会経済的状況や生存戦略を明らかにし、メディアで取り上げられたような「ゾウを酷使するゾウ使い」といったネガティブなイメージとは異なる姿を描き出している。

しかし、既存の研究においては、クアイの人々がゾウ使いとして収入を得ることやゾウと共に生きることが、「我々」とは異なる「彼ら」の文化として、あたかも現代社会に生きる私たちとは別様な生き方であるかのように捉えられてきた。また、ゾウ使いとゾウの関係については、主体／客体関係以外の関係性が詳細に描き出されておらず、ゾウとの実際の関係性の中でゾウ使いがいかなる存在であり、なぜ人々がゾウ使いになるのかは検討されてこなかった。

そこで、本稿では、人間と動物が共に生きる実際の関係性に注目するダナ・ハラウェイの議論³を踏まえた上で、クアイのゾウ使いについて再考すると共に、人間と動物が共に生きることにについて一視座を提示することを目指す。

本稿の構成としては、本章で、文化人類学における自然と文化の二項対立的な見方に関する議論を押さえつつ、ゾウ使いとゾウの関係を考察するために動物を「重要な他者 (significant other/s)」と捉えるハラウェイの議論について概観する。第2章では、調査と調査地について説明する。第3章ではタイにおけるゾウの位置づけを明らかにした上で、ゾウ使いがタイ社会においてどのようにまなざされ、どのような範疇を持つのかを明らかにする。第4章においては、事例を取り上げながら、クアイの人々がどのような存在としてゾウ使いを捉え、ゾウ使いへととなっていくのか、その過程を明らかにする。そして、「ゾウを支配・利用するゾウ使い」と「ゾウ使いによって支配・利用されるゾウ」という固定的な二項対立関係を前提とせずに、ゾウ使いとゾウが共に生きる事例を検討することを通して、人間と動物が共に生きることとはどのようなことなのかについて考察する。

(2) 自然と文化の関係への注目

従来の人類学では、世界には「自然」と「文化」の二つの領域が存在すると捉えられてきた [森田 2016]。そして、二つの領域の間の関係性、例えば「女」と「男」や、「野生のもの」と「飼育されたもの」、「非人間」と「人間」

は、「自然」と「文化」の関係を前提として二項対立図式の中で捉えられた。ストラザーン [1987]は、自然／文化の二分法は、どちらか一方の領域が他方に対して統御する／されるという「統御」の概念によって規定されており、こうした見方が西洋に特徴的なものであることを指摘した。彼女が事例として取り上げているハーゲンでは、「野生のもの」と「飼育されたもの」に対応し得る「ロミ」と「ムボ」という概念があるが、何がロミで何がムボとされるかは、西洋のように「統御」の概念に基づくものではないという。したがって、二つの領域を二項対立関係にあるとしてアプリアリに捉えることはできないとした。

また、ラトゥール [2008]は、ありとあらゆるものを「非人間」と「人間」といった二つの領域に分類し、その関係を切り離そうとする働きが近代に特徴的なものであると指摘した。そして、二つの領域に分けられたものの関係を対称的に捉える必要があるとした。さらに、非人間と人間の絡まりあいの中で、諸々のアクターのエイジェンシーによって主体が形成されるとする視座を提示した [ラトゥール 2019]。

こうした、従来は二項対立を前提として捉えられてきた「自然と文化」や「非人間と人間」の関係の再考を経て、新たな実践として、人間と動物を含む多様な種の交錯に注目した「異種間の双発的な出会いを取り上げ、人間を超えた領域へと人類学を拡張しようとする」 [奥野 2019, 5]記述が行われている。そこでは、これまで人間中心主義的な視座から「表象」や「人間にとって利用価値があるもの」として論じられてきた動物などの多様な種との関係性の中で、いかに人間が「人間」となっていくのかが問われている [Kirksey, Schuetze, & Helmreich 2014]。

(3) 共に生きる存在としての動物の重要な他者性

人間と動物の交錯に注目している議論の中で、ゾウ使いをゾウとの関係性の中で捉えることを試みる本稿では、人間が個別具体的な動物との出会いによって新たな主体へと変容する姿に注目しているハラウェイの議論を参照する。

ハラウェイ [2013a]は、ヴァンシアンヌ・デブレの家畜化の再定義や、メアリー・プラットのコンタクト・ゾーンの概念を参照しながら、動物を人間と共に生きる存在として捉え直している。従来、家畜化は、動物が人間のた

めに従属させられ、人間の目的のための手段になることとして考えられてきた。これに対し、デブレは、家畜化を、動物と人間の双方が相互関係性の中で相手から影響を受け、相互に利用可能となり、相手に調子を合わせられるようになっていく実践として再定義しようと試みている。こうした見方に基づけば、これまで、人間と家畜の関係は、人間による支配と利用という主体／客体の二項対立的な関係が前提とされてきたが、関係の中で人間も利用され、お互いがお互いにとって必要な存在となっていく過程に光を当てることが可能となる。さらに、ハラウェイは、人間と動物が出会う場に注目し、プラットのコンタクト・ゾーンの概念を拡張している。プラットは、言語学で使われていた、異なる文化が出会う社会空間において、異なる母語の話者たちが安定したコミュニケーションを図るために生み出した即席の言語である「コンタクト・ランゲージ」から「コンタクト・ゾーン」という概念を考案した。コンタクト・ゾーンは、もともと力が不釣り合いな関係性の中でしばしば構成され、対象物が互いの関係の中で、互いの関係によって構成される場のことを指している。コンタクト・ゾーンの概念を人間と動物の出会う場に適用すれば、そこには非対称的な力関係が存在するものの、人間と動物がその関係の中で、その関係によって主体として構築されていると捉えることができる。

また、ハラウェイ [2013a; 2013b]は、人間と動物が出会う場に注目しながら、動物を含む共に生きる存在を「伴侶種 (companion species)」として捉えることを提案している。伴侶種とは、「パートナーのどちらもその係わり合いに先んじて存在せず、その係わり合いはたった一回きりでは決して済まないような、相互構成的な関係性」 [ハラウェイ 2013b, 21]を結ぶ「異種から成るカテゴリー」 [ハラウェイ 2013b, 25]のことを指す。そして、伴侶種の、関係性を取り結ぶかけがえのないパートナーでありながらも、具体的な差異を持つという意味で著しい他者である「重要な他者性 (significant otherness)」により、関係の中で全ての主体が、これまでには存在しなかった新しい主体へと変容することを論じている。

ハラウェイ [2013a]が事例として取り上げているのが、彼女自身が生と死を支配している愛犬カイエンヌと共に参加するアジリティーというイヌの障害物競走である。ハラウェイは、アジリティーの場をコンタクト・ゾーンと捉え、そこで人間はイヌのハンドラーではなく、異種間のチームメンバーと

なるとしている。アジリティーは人間の考え出したスポーツであり、人間とイヌは人間が設けたルールに縛られ、人間によってデザインされた評価の基準に支配される。参加を応募するのも、参加するクラスにエントリーするのも人間である。したがって、ここでは非対称的な力関係が確かに存在する。しかしながら、パフォーマンスの基準は人間とイヌの双方にとって自然なものではなく、人間もイヌと一緒にトレーニングすることが必要とされる。そして、その過程で、イヌが人間の判断に従うことのみならず、イヌ自身が判断を行うことや、人間がイヌを信頼し返すということが出来るようになっていく。こうした異種間のチームにおいて、お互いがお互いの責任を果たすことで、まだ知られていない「可能かもしれない」[ハラウェイ 2013a, 338]ことが開かれ、それぞれがそれまでとは異なる新たな主体へと変容していく。

ハラウェイがアジリティーを事例として論じるコンタクト・ゾーンの特徴に対し、合原 [2017]は、宮崎県椎葉村の猟師と猟犬の関係を事例として、空間的位相の違いによってコンタクト・ゾーンにおける力関係と主体構築の性質が異なることを指摘している。猟師と猟犬の接触領域が里の場合、猟師が猟犬に対して特別な世話やしつけを行うわけではなく、むしろ品種改良や処分に関する決定を行うことから、猟犬を狩猟のための道具的存在として捉えるような側面があり、権力を伴う階層的要素が顕著となる。一方、接触領域が山の場合には、猟師と猟犬が意思疎通を行い、双方が身体を規律しながら、お互いの主体性を構築し合う。したがって、里と山という領域の違いによって、コンタクト・ゾーンの特徴が異なるとした。

こうした人間と動物が実際に会う場や、そこに存在する力関係、そして出会いによる変容を論じたハラウェイや合原の議論は、ゾウ使いをゾウとの関係から再考する本稿にとって示唆的なものである。しかしながら、これらの事例では、特定の空間において人間が動物の生死を支配する静的で固定的な力関係を前提として議論がなされてきた⁴。人間と動物の関係において、存在する非対称性が固定的で、必ずしも人間が動物に対して絶対的な力を持っているとは限らない。それを踏まえつつ、本稿では、クアイの人々がゾウと向き合う場を広くコンタクト・ゾーンとして捉え、人々がいかにゾウとの出会いによって、ゾウ使いへと変容していくのかを論じる。

2. 調査概要

(1) 調査期間と方法

本稿で使用する主なデータは、2017年9月、2018年4月から5月及び8月から10月、2019年9月から10月にかけて、スリン県タトゥーム郡ガボー町タクラーン村で行ったフィールド調査により収集した⁵⁾。筆者は、村に泊まり込みながら、ゾウの所有者やゾウ使いを含む村の人々を対象として聞き取りと参与観察を行った。さらに、ゾウ使いとゾウの関係性に注目するために、村のゾウ使いとゾウが従事しているプロジェクトにおいても参与観察を行った。

また、人々がゾウ使いになっていく過程を描き出すために、筆者が2008年から2011年に断続的に同調査地で行った人々の日々の暮らしに関する調査と、2011年から2012年の間に行った村のゾウ使いたちの出稼ぎ先であるタイ東部チョンブリー県の観光施設での聞き取りと参与観察のデータも使用している。

(2) 調査地概要

調査地であるタクラーン村の位置するタイ東部スリン県は、人口約140万人⁶⁾を有し、毎年11月の第3週にゾウ祭り(Surin Elephant Round-Up)が行われることから、「ゾウの県」として国内外に知られている。ゾウ祭りの際には、スリン市街地にスリン県のゾウが集結し、アユタヤとビルマの戦闘を模したショーや、ゾウのためのビューフェなどが行われる。

スリン県でゾウを扱っているのは、クアイの人々である。タイ国内におけるクアイの人々の人口は、スリン県を中心としてブリラム県やシーサケート県などに集中している。しかし、クアイの中でも、実際にゾウと共に暮らしているのは、スリン県のタクラーン村を中心とした一部の地域の人々のみである⁷⁾。



＜写真1＞ バカムの社

タクラーン村は216世帯903人が暮らす農村で、主産業は稲作を中心とした農業であるが、副業であるゾウに関連した事業による収入の方が多くなっている⁸。村には、ゾウ狩りの際に儀礼を行う場であったバカムの社 (*san-pakam luang*) があり (写真1)、多くのゾウがいることから「ゾウの村」と呼ばれている。

タクラーン村には Surin Elephant Study Centre (以下、センター) というエレファントショーのためのスタジアムや博物館を備えたスリン県自治体の管理する観光施設がある。センターでは、ゾウを観光商品としてタクラーン村周辺地域とスリン県の観光開発を目指す Surin Elephant World Project がスリン県自治体によって実施されている。また、センターと隣接した土地では、タイ王国動物園機構が、ゾウとクアイ文化の保護と、観光による地域開発を目指す Elephant Kingdom Project を実施している。これらのプロジェクトでは、登録したゾウに対して、プロジェクト内での役割や容姿に応じて月給を支払うとともに、ゾウの食糧となるサトウキビなどの植物を栽培するための土地の無償貸与などを行っている。この二つの大きなプロジェクトと連携しながら、NPO などによるプロジェクトも多数持ち込まれている。

村の人々は、こうしたプロジェクトに、ゾウの所有者、ゾウ使い、スタッフ、労働者として携わったり、センターやその周辺での土産物や食べ物の販売などを行っている。また、教員や自治体の職員といった公務員、企業の社員などとして雇用されている人々や、専業農家もあり、ゾウに関わらない仕事に就いている人々もいる。

3. 多義的な「ゾウ使い」の位置づけと範疇

(1) タイにおけるゾウの位置づけとゾウ使いへのまなざし

タイのゾウは、アジアゾウであり、1939年の荷役動物法 (Beast of Burden Act) により荷役動物として位置づけられている飼育ゾウ (*chang-liang/ban*) と、1992年の野生生物保全・保護法 (Wildlife Preservation and Protection Act) によって保護地区内で保護の対象とされている野生ゾウ (*chang-pa*) に区分することができる。

こうしたゾウは、ヒンドゥー教や仏教においては神聖な存在とされており、国家の自由を守る存在や、権威や繁栄の象徴ともされてきた。また、その役割は時代ごとに変遷してきた。かつては物資運搬や戦争で重宝されてきたが、

主に北タイ山間部での林業に従事するようになり、その後、1989年に森林伐採が禁止されたことから観光業へとシフトしていったとされている [Laohachaiboon 2010, Meepan 2009, Sakunwatthana 1995]。

森林伐採禁止以降の飼育ゾウの位置づけに関しては、Laohachaiboon [2010]が公的機関の存続のための戦略としてゾウの保護が行われてきたという視点から、その変遷について論じている。森林伐採禁止以前、飼育ゾウは林業などに従事する荷役動物として位置付けられていた。しかし、森林伐採禁止以降は、林業におけるゾウの役割が消失し、多くのゾウとゾウ使いが失業した。その受け皿として Thai Elephant Conservation Center (以下、TECC) が設立された。TECC は絶滅危惧種としてのゾウの保護を謳いながらエコツーリズムを事業の中心として据え、観光業における新たな役割を与えることで失業したゾウを受け入れるとともに、収益を伸ばしていった。絶滅危惧種としてのゾウは、1998年から始まったタイ政府の「Amazing Thailand」キャンペーンによりエコツーリズムが推進されたことで、経済的動物としての価値を高めることとなる。2002年には TECC の名称が National Elephant Institute (以下、NEI) に変更された。NEI はゾウを国家の象徴として位置づけ直すことで、保護の必要性を訴えるとともに、個別に所有されているゾウを NEI の統率下に置くことを試みた。NEI の試み自体は実現しなかったものの、これにより、ゾウが国家の象徴として保護すべき存在であるとの認識がタイ国内で高まることとなった。

また、1990年代から2000年代にかけては、違法森林伐採におけるゾウの酷使や、バンコクなど都市部での街歩きゾウなどに対して、ゾウが人間によって搾取・虐待されているとして国内外からの批判が相次いだ。その際に NEI は、ゾウ使いたちに十分な知識や経験がないためこうした現象が起きているとし、ゾウ使いに正しい知識を身につけさせるための事業を展開することを決めた。また、ゾウを自然に戻すべきだとする指摘に対しては、タイのゾウたちはこれまでも人間との関係の中で生きてきたとし、そのタイ独自の文化と伝統を守る必要があることを主張した。そうすることで、保護を謳いながらも飼育ゾウを観光業に取り込んでいることを正当化した。

Laohachaiboon は、こうしたタイにおける飼育ゾウの保護は、人間と動物を切り離した上で、動物を自然に戻すという西洋的な思想のもと行われたのではなく、TECC や NEI の存続のため、飼育ゾウを人間との関係から切り

離さずに、観光業における新しい役割を提供する形で行われており、ゾウの保護が第一目的ではなかったことを指摘している。

このように、タイにおいて、ゾウは時代ごとに荷役動物、絶滅危惧種、そして国家の象徴として位置づけられてきた。そして、飼育ゾウの保護が、ゾウ使いなどの人間との関係から切り離されないまま行われてきたことで、ゾウは保護すべき対象でありながら、人間によって利用される存在でもあるという状況が生み出されている。その中で、ゾウ使いたちは、ゾウの搾取や虐待を行い得る存在であり、観光業に従事する上ではゾウを統御する存在であり、さらに、飼育ゾウの保護においては正しい知識を身につけて保護に貢献すべき存在としてまなざされてきた。

(2) ゾウ使いの範疇

前節では、ゾウ使いがゾウの位置づけによって、社会からどのような存在としてまなざされているのかを示した。しかし、どのような人々が実際に「ゾウ使い」と呼ばれているのかは、詳細に検討する必要がある。既に述べたように、一般的にはゾウに乗り、指示を出す人々がゾウ使いとして捉えられるものの、実際に人間とゾウが関わる場では、ゾウに乗ることができない人々がゾウ使いと呼ばれることがある。一方で、ゾウに乗り、指示を出すことができてもゾウ使いではないと言われることもある。本節では、こうしたゾウ使いの範疇の重なりとズレを明らかにする。

飼育ゾウは荷役動物法により、所有者による登録が義務付けられており、登録証（写真 2）が発行されている。この登録証には、ゾウの名前、IC チップの番号、身体的な特徴などとともに、所有者の氏名や住所が記載されている。登録は、ゾウが生まれてから 8 年目に入る時点で行われ、ゾウを転居させる際や、売買や相続により所有者が変わった場合にはその変更を届け出る必要がある。しかし、この登録



<写真 2> ゾウの登録証

証には、ゾウ使いに関する情報は記載されていない。登録証を所持する所有者がゾウ使いであることもあるが、そうではない場合もある。タクラーン村では、ゾウの所有者自身がゾウ使いである場合や、財産としてゾウを相続した女性が所有者で、その夫や子どもがゾウ使いの場合、そして所有者がゾウ使いやゾウの世話をする人を雇っている場合もある。したがって、ゾウに関する唯一の公的な証明書である登録証において、ゾウ使いが誰であるのかは明確ではない。

しかし、タクラーン村では、スリン県自治体などの実施するプロジェクトにゾウを参加させる際に、ゾウの所有者がゾウの名前と所有者の氏名に加え、ゾウ使いの氏名を書類に記入し、それぞれの登録証や ID カードのコピーを提出する必要がある。そして、プロジェクトの参加者リストや出勤簿にはゾウ使いの氏名も記載される。ただし、ここでゾウ使いとして氏名が記載される人々の中には、ゾウに乗ったり指示を出すことが出来ない人々も含まれることがある。それは、プロジェクトによっては、ゾウの健康診断や、所有者とゾウ使いに対する研修への参加のみを求め、ゾウとゾウ使いに毎日出勤することを求めないものがあるためだ。こうしたプロジェクトにおいては、ゾウの食糧の準備などの世話をする人の氏名がゾウ使いとして記載されていることがある。

<事例 1>

ゾウを複数頭所有している 50 代女性のガモンは、ゾウの出勤を求められないプロジェクトに自分のゾウであるメイを参加させることを決めた。そして、メイの食糧や掃除などの世話をしている 40 代男性のスリヤをゾウ使いとして登録した。したがって、スリヤはプロジェクトの書類上はゾウ使いとして氏名が記載されている。

しかし、ガモンは「スリヤはゾウ使いだけど、ゾウ使いじゃない。彼は、メイの世話をしてくれるけれど、本当はゾウのことを恐がっていて、乗ることが出来ない。だから、彼はゾウ使いだけど、ゾウ使いじゃない」としている。

実際にスリヤは、メイの面倒を長く見てきたことから、プロジェクト以外でもゾウ使いと呼ばれることもある。しかし、周囲の人々はガモンと同様に、スリヤがゾウに乗れないことなどを理由として、ゾウ使いではないと言及す

ることもある。

また、タイ国内のアユタヤ、パタヤ、プーケットといった観光地の観光施設では、オーナーが多数のゾウを所有もしくは借用している。そこでは、施設に雇用された人々がゾウに乗り、エレファントショーやエレファントライディングなどのアトラクションを提供している。こうした観光施設においては、クアイの人々がゾウ使いとして雇われていることや、施設のスタッフが業務としてゾウに乗ることがある。

<事例 2>

ゾウ使いとして国内外で働いた経験のあるタクラーン村の人々がゾウを訓練するために雇われたチョンブリー県の観光施設では、ミャンマー人労働者を多数雇用していた。その中の数名がゾウの担当となり、「ミャンマー人のゾウ使い (*khwan-chang phama*)」と呼ばれていた。

ミャンマー人のゾウ使いたちは、この施設で働く以前はゾウと関わった経験がなく、エレファントショーやエレファントライディングの業務はこなしているものの、ゾウに噛まれたり、踏まれるといった事故に遭うことが多かった。それに対してタクラーン村のゾウ使いの一人、ソムサックは「彼らはゾウの世話をして、ゾウの上にも乗るけれど、ゾウ使いじゃない。彼らはただの労働者だ。ゾウたちは彼らが何を言っているのか理解できるから、彼らはゾウの上に乗って、ゾウに命令を出すことができる。けれど、彼らはゾウに教えたり、ゾウの状態を把握したり、ゾウを理解することが出来ない。だから、ゾウに噛まれたり踏まれたりして死ぬんだ。だってゾウのことを理解していないから。ゾウ使いがタコー (*takho*、写真 3) ⁹を使う理由は、ゾウに命令を出すためではなくて、ゾウと意思疎通を図るためなんだ」とした。

このように、一般的な「ゾウ使い」の条件は、ゾウに乗り、指示を出すこととされながらも、事例 1 のように、この条件を満たさない人が「ゾウ使い」として文書上は記載され、「ゾウ使い」と呼ばれることがある。一方で、事例 2 のように、条件を満たしているものの「ゾウ使い」ではないとして言及されることがある人々もいる。また、タクラーン村では、ゾウ使いとしての経験やゾウを訓練する技術を持っているものの、ゾウ使いとして収入を得てい

ない人々もいる。彼らもまた「ゾウ使い」と呼ばれたり、呼ばれなかったりする。

こうしたゾウに関わる人々は、文脈によっては「ゾウ使い」と呼ばれることがある人々である。つまり、ゾウに乗り指示を出す人、書類上に氏名が記載されているゾウの世話をする人、業務としてゾウに関わる人といったように、それぞれの文脈における「ゾウ使い」の範疇はズレている。そのため、「ゾウ使い」がどのような人々なのか、その範疇を明確に示すことは難しい。しかし、その重なり注目すれば、ゾウに関わる全ての人々が「ゾウ使い」と呼ばれる可能性を持っていると言えるだろう。



＜写真3＞センターのエレファントショーで絵を描くゾウとゾウ使い
(ゾウ使いがゾウの耳にかけている鉤爪のついた木の棒がタコー)

4. クアイのゾウ使いとゾウの関係

(1) クアイにおけるゾウ使いの資質

前章では、ゾウ使いの位置づけや範疇が重なりながらもズレている様相を明らかにした。これを踏まえつつ、本節では事例1や事例2におけるクアイの人々の「ゾウ使いだけどゾウ使いではない」という語りが示す、ゾウ使い

の資質について検討する。

そもそもクアイ語には、タイ語の「ゾウ使い (*khwan-chang*) 」と同じ意味を持つ総称的な単語は存在しない。そのため、現代のクアイの人々は「ゾウ使い」というタイ語を用いる。しかし、かつてタクラーン村などでゾウと暮らしてきたクアイの人々の間には、ゾウ狩りの経験に応じた階級制度が存在した。これは、クルーバーヤイ (*khruabayai*) を頂点とした階級制度であったとされる¹⁰。最下位からみていくと、他の階級の人々の補佐をするマ (*ma*)、新人でまだゾウを捕獲することが出来ないモージャー (*moja*)、1 頭から 5 頭のゾウを捕獲した経験のあるモーサディアン (*mosadiang*)、6 頭から 10 頭のゾウを捕獲した経験があるモーサダム (*mosadam*)、モーサダムのうちクルーバーヤイによって次のゾウ狩りのリーダーとして指名されたクルーバー (*khrua*)、そして、ゾウを 10 頭から 15 頭以上捕獲した経験があり、全ての儀礼を執り行うことができるクルーバーヤイの順となっている。マ以外は、モーチャー (*mochang*) と呼ばれ、クルーバーヤイによって任命されることで、その階級を得ることが出来るとされている。かつてクアイの人々はこの階級に従って、現在の「ゾウ使い」と呼ばれている人々を呼んでいた。

この階級は、それぞれの階級の要件が示しているように、ゾウ狩りの経験と深く結びつけられていた。そのため、現代のゾウ使いたちはゾウ狩りの経験を積むことが出来なくなったことから、ゾウ狩りの経験があり、現在も儀礼を行う高位の階級を持つ人々を除いて、この階級制度は使われなくなった。また、クアイの人々は、現代のゾウ使いたちのことを、ゾウ狩りの経験を持たないからと言って、マやモージャーと呼ぶことはしない。その理由としては、この階級制度が既に使われなくなって半世紀以上が経過しているため、村の中でもこの階級制度のことをよく知らない人が増えていることや、ゾウ狩りの経験がないからと言って現代のゾウ使いがマやモージャーと同等だと言うことは出来ないということが語られている。

ゾウ狩りの経験がゾウ使いを規定しなくなった現在、クアイの人々がゾウ使いの持つべき資質として言及するのが「ゾウを理解すること」である。例えば、逆説的ではあるが、前章で扱った事例 2 において、タクラーン村のゾウ使いたちが、ミャンマー人ゾウ使いたちはゾウ使いではないとする理由として、ゾウのことを理解していないことをあげている。また、タクラーン村においてゾウ使いの中でも「良いゾウ使い」とされるのも、ゾウのことを理

解し、冷静にゾウと接することができる人々である。タクラーン村の人々は、ゾウは話すことができないものの人間の言葉を理解していると言う。ゾウは言葉が話せない代わりに、ゾウ使いに対して声や鼻で意思疎通を図っており、ゾウ使いたちはそうしたゾウの様々な投げかけに対して応答する必要がある。また、ゾウ使いたちはゾウからの投げかけに対して応えるだけでなく、タコーや言葉などを用いてゾウに対して投げかける必要もある。そうしたやりとりを行っていくために、ゾウ使いたちはゾウのことを理解する必要があるとされる。

加えて、ここでゾウ使いたちが理解すべきゾウとは、不特定多数のゾウのことではなく、ゾウ使いが向き合う個性をもった特定のゾウのことである。したがって、ゾウを理解するという資質は、決まった知識や経験によって得られるものではなく、個別具体的なゾウと向き合う中で得られるものであると考えられる。

以上のように、タクラーン村では、ゾウのことを理解し、やりとりを行うことがゾウ使いの資質として捉えられている。したがって、クアイの人々の「ゾウ使いだけれどゾウ使いではない」という言葉は、ある文脈においてゾウ使いという範疇には入るものの、ゾウ使いとしての自らが向き合う個別具体的なゾウのことを理解し、やりとりを行うことができていないという意味を持っていると理解することができる。

(2) ゾウ使いになる人々

タクラーン村の人々がいかにしてゾウ使いになるのかについて、Sakunwatthana [1995]は、人々はゾウの調教に関する知識を父親から直接教わることが規律によって禁じられているため、親しい親族や信頼の出来る人物から学ばなければならないとしている。しかし、筆者が聞き取りを行った20代から50代のゾウ使いたちは、Sakunwatthanaが言及している厳格な規律の中でゾウ使いになったというよりも、偶然のきっかけによって徐々にゾウ使いへとなっていったことを語る。本節では、村の人々にとってゾウがどのような存在であるのかを示した上で、人々がいかにかゾウ使いへとなっていくのかを検討する。

ここでは、まず、村に暮らしながらもゾウを所有しておらず、ゾウ使いでもない人々にとって、ゾウがどのような存在として語られるのかを二つの事

例を通して見ていきたい。

<事例 3>

センターの向かいの家で暮らしている 50 代女性のナルモンは、蚕から糸を紡いだり、稲作を行いつつ、娘からの仕送りを受けて生活している。彼女は家の軒先に腰かけて作業を行うことが多く、道を歩くゾウの姿を毎日眺めている。彼女の家族にはゾウを所有している人やゾウ使いはいないものの、娘はセンターで土産物を販売していることから、この村にゾウがいることの恩恵を受けていると感じているという。

ナルモン：私はゾウについてはよく知らないよ。だって、私の家族はゾウを所有したことがないからね。でもね、私は、私たちと一緒に暮らしているゾウを怖いと思ったことは一度もないよ。彼らは私たちの隣人のようなものさ。(2018 年 9 月 12 日)

<事例 4>

稲作を営みながら、菓子や日用品を販売する小さな商店を営む 60 代男性のソムチャイは、小学校を卒業してから親の水田を引き継ぐために、農家となった。彼自身は、ゾウに特別な思いはないとしながらも、ゾウについてこのように語った。

ソムチャイ：俺はゾウ使いになりたいなんて思ったことはない。でも、やつらのゾウと一緒にいたいっていう気持ちは理解できる。俺は田んぼを継がなきゃならなかった。でも、この村はゾウがいたから発展してきたってことを俺は知ってる。多くの観光客がゾウを見るためにこの村を訪れる。でも俺にとってはゾウよりも観光客の方がよっぽど興味深いけどな (笑)。だって、ゾウは俺たちと長い間一緒にここで暮らしてきた住民なんだ。俺はゾウがいなし生活なんて知らないね。(2018 年 9 月 13 日)

ナルモンやソムチャイのようにゾウを「隣人」や「住民」とする語りは、年齢や性別、職業を問わずタクラーン村でよく聞かれるものである。一般的

なタイ人は、ゾウをテレビニュースや新聞、SNS 等でしか見たことがなく、ゾウが国家の象徴とされながらも遠い存在であることを考えれば、タクラーン村の人々は、ゾウを身近に感じている人々であることがわかる。

こうしたゾウを身近に感じている人々が、いかにゾウ使いになっていくのかに注目してみると、自宅以外の場所でゾウと接したことで、ゾウに惹かれ、ゾウを好きになることが、ゾウ使いになっていくきっかけとなっている様相が見られる。

<事例 5>

事例 2 にも登場したソムサックは、長年ゾウ使いとして働いてきた経験を持ち、現在はプロジェクトのスタッフとして従事しながら、ゾウ使いの兄の代わりにゾウ使いの仕事を単発で引き受けることもある 40 代の男性である。ソムサックは、自らがゾウ使いになった経緯をこのように語る。

ソムサック：僕は小学校を卒業してから、バンコクにある婦人靴の工場で働いた。でも、バンコクで働くことに疲れて、この村に帰ってきたんだ。だけど、この村でする仕事はなかった。だから、ゾウ使いをしていた友達の家遊びに行くようになった。僕は何もすることがないから、遊びに行ったついでに、友達がゾウの世話をするのを手伝うようになったんだ。そして、手伝いをするうちにそれぞれのゾウが異なる性格を持っていることに気付いて、ゾウのことが好きになっていったんだ。だから、僕はゾウ使いとして働きたいと思った。そして、友達を手伝っている間に、ゾウ使いとしての仕事や、どのようにゾウと関わるのかを学んだ。そしたらある日、韓国でゾウ使いとして働く機会を得て、それからゾウ使いとして働くようになったんだ。(2018 年 9 月 2 日)

ソムサックのみならず、他のゾウ使いやその家族も、彼らがゾウ使いになったのは、家族がゾウを所有していなくとも、近くにゾウがいて、ゾウを好きになっていったからだと言っている。

<事例 6>

シリポーンは、村で食堂を営んでいる 50 代の女性である。彼女の家族は、家を離れて、他県でゾウに関連する仕事をしている。

シリポーン：私の家族はゾウを所有していない。でも、私の夫はパタヤの観光施設でゾウ使いとして働いている。彼はゾウといることが好きだから。それに、私の息子もパタヤでゾウ使いをしているし、娘もチェンマイのエレファントキャンプでスタッフとして働いている。私の息子と娘は、私の夫がゾウ使いだからそういう仕事についたんじゃないわ。息子の場合、他の人のゾウと一緒に遊ぶのが好きだったの。だから、彼は友達の家でゾウの世話をしていた。彼はゾウに惹き付けられたのよ。だから、彼は今パタヤでゾウ使いの仕事をしている。彼のように、家族がゾウを所有しているかどうかは、ゾウ使いになる上で重要なことではないわ。でも、ゾウが周りにいるっていうことが将来のゾウ使いを惹き付けるための重要な要素になってる。この村にはたくさんのゾウがいる。だから、心がゾウを愛するの。(2018 年 5 月 23 日)

二つの事例のように、ゾウが周囲にいたことから人々がゾウ使いになっていくという語りは、タクラーン村でよく聞かれるものである。特に、ソムサックのように、村のゾウ使いの友人を手伝ったことがきっかけとして語られるケースは多い。実際に、ゾウ使いたちが全ての仕事を一人でこなすことは少なく、家族や友人が手伝っている姿は村でよく見られるものである。その事例の一つとして、新米ゾウ使いのタナサックの手伝いをするようになったトンチャイがゾウを好きになっていく様子を取り上げたい。

<事例 7>

トンチャイは、4 歳になるゾウのジョイのゾウ使いをしているタナサックを手伝っている 14 歳の少年である。タクラーン村では、ゾウ使いの仕事として、ゾウに乗ること、ゾウの世話をすること、ゾウの食料を準備することの三つが言及されることが多く、タナサックもプロジェクトのエレファントショーに従事するとともに、毎日ジョイの水浴びや健康管理、糞の処理、そし

て食料の準備を行っている。しかし、タナサックはゾウ使いとして一人立ちして二年目であり、かつ、まだ子ゾウのジョイの訓練も行なわなければならないため、一人で全ての仕事をこなすのは難しい。特にゾウの食料の確保と準備は、時間も体力も消耗する仕事である。一日のほとんどの時間を食べることに費やすゾウの食糧を確保するために、タナサックはタクラーン村のゾウ使いたちはバナナやパイナップルなどを購入するとともに、自分の土地やプロジェクトから無償で借り受けた土地を利用してサトウキビなどの植物を育てている。食糧となる植物を育てるためには、土を耕し、種をまき、雑草を抜くなどの日常的な手入れが必要となる。さらに、朝と夕方には植物を刈り、家の敷地内につながれているゾウの元まで運ばなければならない。トンチャイは学校から帰宅後に、タナサックとタナサックのゾウ使いの友人と共に、タナサックの父親の畑で植物を刈り、ジョイに与える仕事を手伝っている。

もともと、トンチャイは、ゾウの世話を手伝いに来ていたわけではなかった。トンチャイは親子関係がうまくいっておらず、それを心配したタナサックが自宅に遊びに来るようにトンチャイに言ったのだ。タナサックの家ではWifiが使えることもあり、トンチャイは頻繁にタナサックの家を訪れるようになった。はじめのうちは、タナサックがジョイの世話をしている、スマートフォンに集中していたトンチャイだったが、何週間か経つと次第にタナサックを手伝うようになった。最初はジョイから距離を置き、タナサックに「バナナをあげる？」などと伺っていた。しかし、徐々にジョイに食料を与える際の距離が近くなり、食料を与えたり、糞を拾うといったジョイの身の回りのその場限りの簡単な世話のみならず、タナサックの畑での作業も手伝うようになった。畑仕事も手伝うようになったトンチャイに対してタナサックは、作業の後にジュースを振舞うようになった。そして、その際にはいつもジョイのすぐ近くで、つまみを食べながら三人は歌を歌ったり、語り合っていた。

以前は、好奇心旺盛な性格のジョイが鼻を伸ばしてもトンチャイは逃げるようにしていたが、時間が経つにつれて、自分から手を伸ばし鼻や身体に触れるようになった。そして、彼が「ジョイが好き」とこっそりとジョイに告げている様子も見られるようになった。その後、トンチャイはタナサックや他のゾウ使いたちに、ゾウの仕草の意味や、ゾウとのコミュニケーションの

とり方について尋ねるようになっていった。彼は「ゾウ使いになりたい」と筆者にこっそりと教えてくれた。

トンチャイの事例は、ソムサックや、シリポーンが語った友人の家に遊びに行き、世話をを行うようになり、ゾウのことを知り、ゾウを好きになることでゾウ使いになっていく過程の初期の部分に当たると考えることができる。14歳のトンチャイが今後ゾウ使いになっていくのかはわからないが、トンチャイがゾウ使いになるためにゾウ使いに必要とされる知識や経験を身に付けていったのではなく、ジョイとの出会いによってジョイのことを気かけ、ジョイに惹かれ、ジョイのことを理解するようになり、ゾウ使いの仕事覚えていく様子が見られた。そこには、ジョイと触れ合う前には見られなかったトンチャイの姿がある。

では、人々が、ゾウに惹かれ、好きになっていく中で、どのように実際にゾウ使いとして働くようになっていくのであろうか。ここでは、事例7に登場しているタナサックが、どのような経緯を経てゾウ使いになっていったのかを事例として取り上げる。また、この事例ではタナサックが見習いゾウ使いとして働いたチョンブリー県の観光施設でのゾウの訓練についても触れ、人間もゾウも、訓練を通してお互いのやりとりが可能となっていく様子に注目する。

<事例8>

タナサックは、ゾウを複数頭所有している家の20代後半の長男である。彼の家では、基本的にゾウたちの世話を雇っているゾウ使いに任せており、タナサックが18歳になるまでは自分の家のゾウを世話する様子は見られなかった。タナサックは村の学校を18歳で卒業すると、スリン県内の大学へと進学し、村に帰ってくるたびに、村の学校を同じ年に卒業してゾウ使いとなった友人たちの家を行き来するようになった。そして、彼は次第に大学に行かなくなり、ゾウ使いとして働きたいと言うようになった。タナサックの両親は、まずは大学を卒業するよう説得しようとした。しかし、タナサックは、ゾウが好きで、ゾウ使いとして働けば収入も得られるからゾウ使いになりたいのだと主張した。それを受けてタナサックの父親は、ゾウが好きになってしまったのなら仕方がないとし、大学に行かないのであれば働いた方が

彼のためになると考え、事例2で取り上げたソムサックらと共にチョンブリ一県の観光施設での出稼ぎにタナサックを同行させた。

チョンブリ一県の観光施設では、当時、約20頭のゾウを所有していた。その半数の調教済みのゾウをミャンマー人のゾウ使いが担当し、エレファントライディングなどを行っていた。一方、残りの半数は、これまでに訓練を受けたことのないゾウたちであり、ソムサックらは彼らの訓練のためにこの施設に雇用された。タクラーン村においては、ゾウが2歳になった頃から訓練を始めるのが適切な時期とされているが、訓練を任されたゾウたちは既にその年齢を過ぎていた。ゾウ使いたちは、ゾウたちが訓練の適齢期を過ぎていることから、人間や人間社会に慣れるのが難しいゾウもいるのではないかと危惧しつつも、食糧の準備や糞の処理などゾウの身の回りの世話をすることで、ゾウとの触れ合いを徐々に増やし、ゾウたちに慣れてもらうとともに、彼らもそれぞれのゾウの性格の把握に努めた。そして、イラつきやすいゾウ、穏やかなゾウ、落ち着きがないゾウなどそれぞれの性格に配慮しながら、性格が合いそうな人をゾウ使いとして担当に付けることに決めた。

訓練では、ゾウ使いがタコーの鉤爪の部分でゾウの耳に引っ掛けて引っ張りながら一緒に歩く訓練を行ったり、「進め」、「止まれ」、「下がれ」といった言葉による命令(*kham-sang*)を覚えさせたり、ゾウ使いが背中に乗り足で出す指示通りに動く訓練などを行った。こうした基本動作ができるようになってから、それぞれのゾウの得意・不得意を考慮しつつ、ショーなどで求められる「鼻をあげる」、「片足をもう一方の足にかける」、「座る」といった動作を訓練していった。ゾウ使いたちは、ゾウの訓練は「自分の子どもに様々な所作を覚えさせたり、して良いことと悪いことの判断を教えるのと同じ」であると語っていた。ただし、人間とゾウの間には身体的な差異が存在するため、人間の子どもに対する教育と全く同じやり方で訓練が行われるわけではない。ゾウは人間よりも大きな身体と厚い皮膚を持っていることから、子どもを叱るようにゾウ使いたちが手で身体を叩いても、ゾウは叱られていると感じない。そのため、ゾウ使いたちは、タコーを使って打つことで、してはいけないことを伝えたり、鉤爪の部分で「もっと足を上げる」などといった指示を伝える必要があるという。

訓練を行うゾウの中で、タナサックが任されたのが、4歳のアイだ。先輩ゾウ使いたちは、タナサックにゾウ使いとしての経験がないため、本来であ

れば訓練を受けていないゾウを担当させるのはタナサックにとってもゾウにとっても怪我などの危険があると考えていた。そのため、ゾウの中で一番若いことから身体が小さく、物覚えも早いであろうアイをタナサックに担当させつつ、先輩ゾウ使いのアピチャートがタナサックとアイの指導を行うこととなった。アピチャートは、まずタナサックにアイの食料の準備や、糞の処理などの身の回りの世話の仕方を教えた。その後、タナサックのアイに対する声かけや命令の仕方とともに、タコーの使い方、足での指示の出し方などを指導した。一方、アイに対しても命令に対する動作などの訓練を行った。

タクラーン村では、基本的に自分のゾウを持ったり、特定のゾウを担当するまでは、タコーを所持することはない。そのため、タナサックは、アイの担当となったことで、はじめて自分のタコーを持つこととなった。ただし、ゾウ使いが見習い中の場合は、見習いがゾウを負傷させそうな時やゾウが興奮してしまった時など危険な状況に陥りそうな時に備え、指導役のゾウ使いもタコーを持つ場合が多い。

訓練をはじめたばかりの頃、タナサックはタコーでアイを打つことが多すぎると先輩ゾウ使いたちから指摘されていた。タクラーン村では、タコーでゾウを頻繁に打つゾウ使いはゾウに恐怖心を与える「良くないゾウ使い」とされており、タナサックがアイとうまくやりとりが出来ず、タコーを使って力任せにアイを自分に従わせようとしている様子が先輩ゾウ使いたちの目に止まったのだ。タナサックはそれに対し、アイが言うことを聞かないから打つことで教育をしているのだと反論していた。しかし、先輩ゾウ使いたちがタコーを使った訓練を行いながらもゾウのことを気かけ、慰める様子を見たり、ミャンマー人のゾウ使いたちがタコーでゾウを従わせる様子が否定的に語られるのを聞いたり、アピチャートから指導を受けたりしたことで、時間の経過とともにタナサックがタコーでむやみにアイを打つ様子は見られなくなっていくた。

タナサックは、先輩ゾウ使いたちに見守られながら、徐々にタコーを使う際の力加減や頻度、声の掛け方、命令の出し方、そして足での指示の出し方などを身につけていった。また、アイも言葉やタコー、足を用いたタナサックからの指示に応えられるようになり、座ったり、片足を動かしたりできるようになっていった。タナサックとアイのやりとりは、タナサックがタコーを用いて一方的に命令する形から、タナサックが指示を出し、アイがその指

示を読み取り、行動に移し、そのアイの行動をタナサックが読み取るというような双方向的なものになっていった。タナサックとアイがお互いに調子を合わせられるようになっていった様子は、彼らの移動の仕方の変化にも現れている。訓練をはじめたばかりの頃、タナサックとアイは一緒に並んで歩くことすらできなかった。それが、二ヶ月が経った頃にはタナサックがアイをタコで引っ張りながら歩くようになり、半年後にはタナサックに引っ張られなくてもアイがタナサックに並んで歩くようになっていた。そして、一年後には、アイがタナサックを背中に乗せて歩く姿が見られるようになった。アピチャートは、タナサックとアイの様子を見ながら、徐々にアイの世話をタナサック一人に任せるようになっていった。

タナサックは、この観光施設で約一年間ゾウ使いとして働いた。しかし、ゾウたちの訓練も一通り終わり、ソムサックやアピチャートたちが施設の給与や住環境がよくないことなどを理由としてタクラーン村に帰ることを決めたため、タナサックも村へ戻ることとなった。村に帰ったタナサックは、大学でもう一度学びたいと言い、スリン県内の大学に戻り、三年で学部を卒業した。両親を含め彼を取り巻く人々は、タナサックがゾウ使いの過酷な仕事に疲れたため、大学を卒業し、公務員など給与が安定しており、社会的にも地位のある仕事に就くことにしたのだろうと思っていた。だが、タナサックは、大学卒業後、出家などを経て、父親の所有するゾウが産んだ子ゾウのジョイのゾウ使いとなる道を選んだ。彼はその際に、「ゾウは本当に好きだけれど、ゾウ使いの仕事は大変なことも多いし、一度は公務員になろうかと思った。でも、ジョイを生まれたときから見ていて、ジョイのことが心底好きだから、他の人にジョイのことを任せることができなかった」と語った。

ジョイの訓練には、タナサックはもちろんのことアピチャートなど村の何人かのゾウ使いたちが関わることとなった。また、ジョイの訓練がある程度終わってからも、近隣に住む先輩ゾウ使いたちはタナサックや家族にジョイの行動の解釈を伝えたり、ジョイが苦手な動作の訓練の仕方をアドバイスするなど、タナサックとジョイを気にかける様子が見られた。タナサックは、アイの訓練をはじめた頃のようにタコでむやみに打つようなことはなく、ジョイが言葉やタコ、足による指示を覚えるまで、何度も訓練を行った。ジョイが苛ついたり、怒ったり、指示とは違うことをした場合にはタコで打つこともあったが、その後にはジョイに「今回はうまくできなかったけど、

次はできるよな？」といった励ましの言葉をかける様子が見られた。ある程度ジョイとのやりとりが出来るようになった段階で、タナサックはスリン県自治体の **Elephant World Project** への参加を決めた。

また、タナサックは、もともと家から離れたところにあったジョイのゾウ舎を、家の裏の自分の部屋からすぐの位置に移し、いつでもジョイのことを気かけられるような環境を整えた。彼はジョイの世話をしていない時も、ジョイのすぐ隣でギターを弾き語りしたり、ゾウ使いの友人やトンチャイらと酒を飲むなど、ジョイの側で過ごす時間は長くなっていった。一方、ジョイはタナサックが寝坊した際や、出勤時間になっても家にいない時には、大きな鳴き声を上げるようになった。ただし、タナサックが事前にジョイに対して外出の予定を伝えてある日には、ジョイが鳴き声を上げないことから、タナサックの家族はジョイとタナサックの間には信頼関係が構築されていると考えていた。

タナサックの事例でも、ゾウ使いになっていくきっかけは、ゾウ使いの友人たちの家に遊びに行き、ゾウが好きになったことであった。ただし、タナサックの場合は、ゾウ使いになることを決め、見習いゾウ使いとして働く中で、ゾウ使いとしての知識や経験を身につけていった点が、友人の家でゾウの世話を手伝う中でゾウ使いとしての仕事を覚えてからゾウ使いとして働くようになったソムサックやシリボーンの息子とは異なる点である。しかし、ゾウ使いとして働くようになるタイミングの違いはあるものの、ゾウとの関りの中で知識や経験を身につけることで一人前のゾウ使いになっていった過程は共通していると考えられる。

タナサックが身につけていった知識や経験は、不特定多数のゾウをいかに訓練するかというものというよりかは、自分が向き合う特定のゾウといかに言語やタコー、身体を用いてやりとりを行うかという性質のものであった。また、タナサックが担当となったアイも、人間によって特定の行動を覚えさせられるのではなく、タナサックやアピチャートとのやり取りの中でゾウ使いと共に何かをすることや、指示を理解すること、そして指示に沿って身体を動かすことを学んでいった。アイの担当になったばかりの頃のタナサックは、やりとりがうまくいかないためにタコーを用いて力任せにアイを従わせようとした。この様子は事例2でソムサックが「ゾウ使いではない」と批判

的に語っていたタコーを命令のために用いているミャンマー人と同様のものである。しかしながら、アイと向き合う中で、タナサックは意図を伝えるために言葉やタコー、身体を用いるようになり、アイも言葉やタコー、身体で指示されることでタナサックの意図を理解できるようになっていった。つまり、ここでは、双方が学習を通じて相手とのやりとりの仕方を身体で覚えていくという過程があったことがわかる。

(3) コンタクト・ゾーンにおける主体の変容と非対称性

前節では事例を通して人々がゾウ使いになっていく様子を取り上げた。本節では、これまでに提示した事例から、コンタクト・ゾーンにおける主体の変容とそこに存在する非対称性の性質について論じ、ハラウェイや合原の論じる人間と動物のコンタクト・ゾーンの特徴に対して新たな視点を提示する。

タクラーン村のクアイの人々がゾウ使いになる過程に注目すると、彼らにとってゾウが「一般化された他者」から「重要な（意味ある）他者」へと変容していることがわかる。心理学者のミード [1991]によれば、「一般化された他者」とは自分にとって一般化される複数の他者のことであり、一方、「重要な他者」とは恋人や配偶者など特に大切な特定の他者のことを指す。この概念に基づけば、ゾウ使いになっていく人々にとってももとは「隣人」や「住民」といった周囲にいて当たり前だが個別具体的な他者として認識されていなかったゾウが、友人の家などで特定のゾウと触れ合い、個別具体的な関係を築くことで、自分自身にとって大切な存在となっていくと考えられる。ここでは、ゾウの存在が単に心理的に重要な位置を占めるようになっただけではなく、ハラウェイが論じるように、著しい差異をもちながらも、やりとりを行いつつ、共に生きる重要な他者としてゾウが立ち現れている。

そして、ゾウの重要な他者性によって、ゾウを身近に感じていた人々は徐々にゾウ使いとして身につける必要のある知識や仕事を覚えていく。事例8で見たように、ゾウ使いとしての知識や仕事を身につけることは、不特定多数のゾウに対して同じ「支配」を行うための調教や命令の仕方を覚えるということではなく、むしろハラウェイが参照するデブレが論じるように、ゾウと調子を合わせられるようになることだと言える。タナサックとアイの事例からは、ゾウ使いが声のかけ方やタコーの使い方を身につける必要がある一方、ゾウも言葉やタコーに込められた意図を理解する必要があり、ゾウ使

いとゾウがやりとりを行うためには双方が意思疎通の仕方を身体に内面化する必要があることがわかる。これは、ハラウェイ [2013a]がアジリティーの事例から論じるような、人間とイヌが訓練を通じて意思疎通を図れるようになることで、新たな主体へと作り変えられることや、合原 [2017]が論じた、山でイヌと猟師が互いに身体を規律する中で、主体性の相互構築が生じる事例と類似している。つまり、彼らがゾウ使いになるということは、個別具体的なゾウと出会い、目の前のゾウに向き合いながら、訓練を通してやりとりが出来るようになることで、出会う前には存在しなかった新しい主体として構築されることだと捉えることができる。したがって、人々がゾウ使いになる過程は、ハラウェイが論じたコンタクト・ゾーンにおける動物の「重要な他者性」による主体の変容であると考えることができる。

ハラウェイ [2013a]によれば、コンタクト・ゾーンにおける主体の変容は、しばしば力が不釣り合いな関係性の中で起きるという。ハラウェイは、コンタクト・ゾーンをアジリティーという特定の空間に限定し、愛犬カイエンヌの生死は自分が掌握しているとして、人間がイヌに対して権力を持つことを前提として人間とイヌの非対称性を論じた。これに対し、合原 [2017]は、人間と動物が顔を合わせる領域の違いに注目し、里ではイヌに対する人間の権力が顕著である一方、山では人間の権力性よりも双方が身体規律によって主体性を構築する過程が顕著になるとして、空間により非対称性の様相が異なるとした。両者の議論において、コンタクト・ゾーンにおける非対称性は、人間が動物に対して持つ権力として固定的に論じられてきた。確かに、飼育ゾウは人間社会に取り込まれ、人間が求める動作を行わなければならないという意味において、人間はゾウに対して権力を握っている。しかしながら、ゾウ使いとゾウの関係性における非対称性は、決してゾウ使いが常にゾウの生死を掌握しているような固定的なものではなく、むしろ逆転し得るものであると考えられる。

事例2や事例8で取り上げたように、ゾウ使いとゾウがやりとりの仕方を身体に内面化していない場合、ゾウ使いがタコーを用いて力任せにゾウを従わせようとすることがある。その際、ゾウはタコーによって恐怖心を植え付けられ、身体に傷を負い、人間によってゾウの生死が掌握されているような状況が生じる。また一方で、事例2のミャンマー人のゾウ使いたちのように、ゾウ使いがゾウのことを理解できていない場合には、ゾウが興奮したり激怒

していることに気づくことが出来ず、人間よりも身体が大きく力も強いゾウによって踏まれたり、噛まれたりし得ることから、ゾウによって人間の生死が握られている状態になる。そのため、事例8では、ゾウとのやりとりの仕方を身につけていないタナサックが訓練されていないゾウを担当することが、タナサックにとってもゾウにとっても危険なこととして考えられている。つまり、ゾウ使いとゾウの関係は、一見すると人間がゾウを支配し、人間が一方的に権力を握っているようにも見えるが、実際には身体的な差異の存在により、ゾウが人間の生死を握るような状況も生じ得るものである。また、そうした力の不釣り合いな関係はゾウ使いとゾウが向き合う際に常につきまとうものであり、ゾウ使いとゾウのやりとりがうまくいかなければ虐待もしくは事故という結果が起り得る。したがって、その非対称性は、既存の議論のように固定的に捉えることができず、常に逆転し得る不安定なものであると考えられる。

そして、身体的な差異による逆転し得る非対称性が根底としてあるからこそ、ゾウ使いとなる人々とゾウは、言葉やタコ、身体を介したやりとりをそれぞれの身体に内面化する必要がある。そうすることによって、関係の安定化を図るとともに、相手の調子にお互いが合わせられるようになっていくのである。

5. 結論

本稿では、タイにおけるクアイのゾウ使いとゾウの関係性を再考するとともに、人間と動物の関係が逆転し得る非対称性を内包しつつ、互いの存在によって新たな主体へと変容することに注目した。

既存の研究において、ゾウ使いとゾウの関係は主体／客体関係を前提として捉えられ、ゾウと共に生きることは「クアイの文化」として静的に描かれてきた。それに対し、人と動物の実際の関係性に注目するハラウエイの見方に従えば、こうした二項対立的な関係を前提とせず、力の不釣り合いな関係性の中で、お互いがお互いの存在によって新たな主体へと構築される様子を捉えることが可能となる。ただし、既存の研究で取り上げられている事例においては、そこでの不釣り合いな関係性が、人間による動物の生死の掌握に基づく固定的な非対称性を前提としてきたことが問題点として指摘できる。本稿では、ハラウエイの議論を参照しながら、いかに人々がゾウ使いになっ

ていくのかに焦点を当てつつ、非対称性の捉え方に新たな視座を提示することを目指した。

タイにおいてゾウは、荷役動物から、絶滅危惧種、そして国家の象徴へとその位置付けが変遷してきた。そして、飼育ゾウは保護されるべき対象とされながらも、ゾウ使いなどの人間との関係を保持したまま、観光業に取り込まれた。また、ゾウが街歩きや違法な森林伐採に従事させられていることが問題として取り上げられる中で、ゾウ使いたちがゾウを搾取する人々として批判を受けた。そして、ゾウ使いたちは正しい知識を身につけゾウを保護すべき存在とされながらも、観光業に従事する上ではゾウを統御する存在であることを求められる状況が生じた。また、「ゾウ使い」が誰を指すのかは、ゾウ使いと呼ばれる人々が文脈ごとに異なっていることから、「ゾウ使い」の範疇は重なりながらもズレていることが明らかとなった。

クアイの人々は、こうしたゾウ使いの範疇を共有しつつも、ゾウを理解することをゾウ使いの資質として捉えている。そして、彼らがゾウ使いになる過程に注目すると、ゾウを隣人や住民といった身近な存在として感じている人々が、友人の家でゾウの世話を手伝うようになり、ゾウのことを好きになり、ゾウ使いとしての知識や経験を身につけることでゾウ使いになっていくことが明らかとなった。ここでは、ゾウが身近にいる他者から、著しい差異を持ちながらも、自分にとって大切な存在として、重要な他者となっていくとともに、人々が個別具体的なゾウと向き合う中で言葉やタコー、身体を用いたやりとりの仕方を身体に内面化していくことで、新たな主体として変容していく様子が見られる。一方、ゾウも同様に、訓練を通して言葉やタコー、身体による指示に込められた意図を理解し、指示された動作を行うことでやりとりが出来るようになっていく。

また、ゾウ使いとゾウの関係においては、絶対的な身体的差異が存在するため、常にその生死が人間によって支配されているとは言い難く、むしろ身体の大きなゾウが人間の生死を握る状況も生じている。そのため、ゾウ使いとゾウは身体的差異を乗り越えるためにも、やりとりの仕方を身体に内面化する必要がある。やりとりがうまくいかなければ、虐待や事故が生じ得るのだ。したがって、ゾウ使いとゾウの関係における非対称性は、逆転し得る不安定なものであり、固定的で一元的なものとして捉えることはできない。

このように、ゾウ使いとゾウの関係に注目すると、人間と動物が顔を合わ

せ、共に生きる場は、ハラウェイが論じるように、常に力の不釣り合いな関係性が存在するとともに、お互いの存在によって、出会う前には存在しなかった主体へと変容していく空間であると捉えることができる。そこでの力の不釣り合いな関係は、人間が動物の生死を握る固定的なものではなく、その非対称性が逆転することもある。そうした中で、人間と動物はやりとりの仕方を身体に内面化し、交渉を行い、関係性の安定化を図ることで、共に生きている。

クアイの人々がゾウに惹かれ、ゾウを好きになり、ゾウ使いになっていく姿は、現代を生きる私たちが動物と出会い、惹かれ、好きになり、個別具体的な関係を築きながら共に暮らすようになっていくことの一つの事例として捉えることができる。私たちは動物との様々な非対称性を内包した不安定な関係の中で、互いによって生き、生かされ、変容していく。そこでは、共に生きるために、お互いにとって新しいやりとりの仕方が必要となり、お互いがその仕方を学習し、身につけていかなければならない。それができてはじめて、身体的な差異を持ちながらも、人間と動物は相手の意図を汲み、調子を合わせられるようになっていく。本稿で取り上げたクアイの人々にとってその相手はゾウであったが、私たちにとっては共に暮らすネコであり、イヌであるのかもしれない。こうした出会いと変容は、動物と個別具体的な関係を結ぶ誰しもが経験するかもしれないことであると考えられる。したがって、本稿で取り上げた「ゾウ使いだけれどゾウ使いではない」と言及される人々にも、個別具体的な関係の中で、ゾウを理解し、やりとりを行う人々になっていく可能性は開かれている。

謝辞

本研究の一部は、公益信託澁澤民族学振興基金による「2019 年度大学院生等に対する研究活動助成」、及び文部科学省博士課程教育リーディングプログラム広島大学「たおやかで平和な共生社会創生プログラム」による補助を受けたものである。

注

¹ モン・クメール系のタイ東北部南部、ラオス南部、カンボジア北部に暮ら

すエスニックグループ。タイ国内ではクイ (*kuy*) もしくはクアイ (*kuay*) を自称し、スアイ (*suay*) と呼ばれることもある。本稿では、インフォーマントの自称であるクアイを使用する。

² 近年では、タクラーン村以外のゾウを飼育している村々が「ゾウの村」を自称することで、ホームステイプロジェクトなどにより観光客を呼び込もうとしている。しかし、現在でも「ゾウの村」といえばタクラーン村のことを指す場合が多い。

³ 本稿では特に『伴侶種宣言—犬と人の「重要な他者性」(The Companion Species Manifesto: Dogs, People, and Significant Otherness)』[ハラウェイ 2013b, Haraway 2003]及び『犬と人が出会うとき—異種協働のポリティクス (When Species Meet)』[ハラウェイ 2013a, Haraway 2008]で取り上げられているハラウェイとその愛犬カイエンヌを主な事例として論じられるコンタクト・ゾーン、伴侶種、重要な他者性の議論を参照している。

⁴ これらの議論では、人間と動物が出会う「権力、知識や技術、道徳の問題に満ちたサイト」[ハラウェイ 2013a, 310]において、人間と動物が不釣り合いな力関係にあることを認め、実際の関係に目を向けるとともに、相手に敬意を払うことの重要性を訴えるために、人間が動物の生死を支配する力関係に注目していることを注記したい。

⁵ 聞き取りによるデータを使用する上で、インフォーマントに不利益が及ばないよう、本稿における全てのインフォーマントの名前は仮名を使用することとした。タイ語の表記については、1999年にタイ王立学士院によって定められた「音声転写法によるタイ字のローマ表記法(Royal Thai General System of Transcription: RTGS)」を基本とする。ただし、本稿で取り上げるクアイの人々の話すクアイ語は文字を持たず、同じ意味を持つ単語でも地域によって発音が異なることから、クアイ語についてはインフォーマントの発音に近い形でローマ字表記とすることとした。

⁶ National Statistical Office of Thailand の2018年12月の統計によるとスリン県の人口は1,397,857人となっている。

⁷ クアイの中でもゾウと暮らしている人々はクアイ・アジアン (*kuay-ajiang*) と呼ばれることがある。アジアンとはクアイ語で「ゾウ」という意味である。

⁸ ガポー町自治体 (2017年9月10日) による。

⁹ ゾウ使いが持つ先端に鉄製の鉤爪のついた木の棒のこと。現地では、タコ

ー (*takho*)、タコーチャーン (*takho-chang*)、コー (*kho*) などと呼ばれている。

¹⁰ 文献によって階級の数や、それぞれの階級に就くための要件は異なっている。また、現代のタクラーン村の人々の間では、階級制度の詳細はよく知られておらず、村人の間でも見解は一致していない。一部の人からは、時代ごとに要件が異なっていたのではないかという話もあった。ここでは、村の人々が目にする機会が多いセンター内の博物館の展示を参照している。

参考文献

- Boonsiritommachai, Raweewan. (2005). *Kanmueang Rueang Chang: Sueksa Korani Muban Taklang Tambon Kapho Ampuea Thatum Changwat Surin* [ゾウのポリティクス：スリン県タトゥーム郡ガポー町タクラーン村の事例]. M.A. Thesis, Chulalongkorn University, Bangkok.
- Haraway, Donna. (2003). *The Companion Species Manifesto: Dogs, People, and Significant Otherness*. Chicago: Prickly Paradigm Press.
- . (2008). *When Species Meet*. Minneapolis: University of Minnesota Press.
- Kirksey, Eben., Schuetze, Craig., & Helmreich, Stefan. (2014). Introduction: Tactics of Multispecies Ethnography. In Kirksey, Eben (Eds.) *The Multispecies Salon*. pp1-24. Durham and London: Duke University Press.
- Laohachaiboon, Suphawat. (2010). Conservation for Whom?: Elephant Conservation and Elephant Conservationists in Thailand. *Southeast Asian Studies*, 48, 1, pp74-95.
- Meepan, Laitongrien. (2009). *Kansueksa Krabuankan lae Panha Kannam Chang Ma Reron khong Klumphuliang Chang Ban Khay Changwat Chaiyaphum kap Klumphuliang Chang Ban Taklang Changwat Surin* [チャイヤブーム県カーイ村のゾウを飼育するグループとスリン県タクラーン村のゾウを飼育するグループのゾウの街歩きの変因、プロセス、そして問題]. M.A. Thesis, Phranakhon Si Ayutthaya Rajabhat University, Phra Nakhon Si Ayutthaya.
- Pianchob, Kanyarat. (2007). *Panha lae Kanchatkan Khwamyakchon khong Khwanchang Chawkuy Changwat Surin* [スリン県のクイ人ゾウ使いの問題と対策]. M.A. Thesis, Chulalongkorn University,

- Bangkok.
- Sakunwatthana, Rakphon. (1995). *Khonliangchang Chawthaykuay Changwat Surin*[スリン県のゾウを飼育する人々タイ・クアイ人]. M.A. Thesis, Thammasat University, Bangkok.
- 奥野克巳. (2019). 「人類学の現在、絡まりあう種たち、不安定な『種』」, 奥野克巳・シンジルト・近藤祉秋(編), 『たぐい』, 1, pp4-15, 亜紀書房.
- 合原織部. (2017). 「猟犬の『変身』—宮崎県椎葉村における猟師と猟犬のコンタクト・ゾーン (接触領域) に着目して」, コンタクト・ゾーン, 9, pp72-97.
- 近藤祉秋. (2019). 「マルチスピーシーズ人類学の実験と諸系譜」, 奥野克巳・シンジルト・近藤祉秋(編), 『たぐい』, 1, pp126-138, 亜紀書房
- ストラザーン, マリリン. (1987). 「自然でも文化でもなく—ハーゲンの場合」, 木内裕子訳, アードナー・エドウィン(編), 『男が文化で、女は自然か?—性差の文化人類学』, pp209-281, 晶文社.
- チン, アナ. (2019). 『マツタケ—不確定な時代を生きる術』, 赤嶺淳訳, みすず書房.
- ハラウェイ, ダナ. (2013a). 『犬と人が出会うとき—異種協働のポリティクス』, 高橋さきの訳, 青土社.
- (2013b). 『伴侶種宣言—犬と人の「重要な他者性」』, 永野文香訳, 以文社.
- ミード, ジョージ・ハーバード. (1991). 『社会的自我』, 船津衛・徳川直人訳, 恒星社厚生閣.
- 森田敦郎. (2016). 「世界はどのようにできているのか」, 内堀基光・山本真鳥(編), 『人類文化の現在: 人類学研究』, pp42-62, 放送大学教育振興会.
- ラトゥール, ブリュノ. (2019). 『社会的なものを組み直す—アクターネットワーク理論入門』, 伊藤嘉高訳, 法政大学出版局.
- ラトゥール, ブリュノ. (2008). 『虚構の「近代」—科学人類学は警告する』, 川村久美子訳, 新評論.

大石 友子 (tomoko.oishi920@gmail.com)